父親の育児に関する一考察

鈴　木　順　子[1)]

A Study on the Child-rearing Fathers

This research is to examine the family environments where the child-rearing fathers grew up in. Based on the current situation, I will examine whether or not the fathers' housework, their childcare & their visits to the centers are related with each other.

Considering the present conditions where they are in, this research aims to find out what promotes their visits to the center. The respondents are the fathers who visit this center in N and T City for their child-rearing purposes. Questionnaires were conducted for this research. This research found out that many fathers had very limited or no contact with children until they had their own children born. Fathers need opportunities/spaces to interact with children, places to learn the child-rearing, and relevant information on child-rearing.

Ⅰ．はじめに

近年、父親の育児への参加が重要視されている。父親の育児参加については国の政策や父親の育児参加を呼びかける厚生省[注1)]によるキャンペーンも実施され、父親にも積極的に育児に関わることが求められるようになった。「イクメン」という言葉が広まり、育児参加への意識は高まりつつあるといわれている。育児休業については次世代育成支援に関する取組方針において、男性の育児休業の取得を10%にすること、女性の取得を80%にすることを当面の目標として掲げている。

しかし、実際の育児休業取得率は2014年では母親の86.6%に対して、男性は2.30%である[1)]。また、「父親の子育ての優先度」では、父親自身の希望は「仕事などと家事育児を同等に重視」の回答が51.6%を占めているが、現実は25.9%である[2)]。希望と現実のギャップが大きいといえる。

日本においては子育て世代の男性の労働時間が長いという調査結果もある[注2)]。企業においての働き方が仕事を優先せざるを得ない現実や育児休業の取得を困難にしていると考えられる。また、「男は仕事、女は家事・育児」に賛成する割合が少なくなってきたがいまだ日本では男女役割分業意識が残っている[注3)]。

母親の育児に関する研究においても、父親の育児への関与により、母親の育児の不安が軽減する結果もみられる（柏木，1994[3)]，牧野1988[4)]）。さらに、夫が育児に協力的である方が子どもへの母親の関わりが良好になる（加藤，2002[5)]）。厚生労働省の「第11回21世紀成年者縦断調査（国民の生活に関する継続調査）結果」（2014）によると、夫の休日の家事・育児時間が長くなるほど第２子以降の子どもの生まれる割合が高くなるという結果がある[注4)]。父親が家事・育児をすることで出生率の向上に繋がっている。父親の育児参加は今後、益々重要になると考えられる。

私は育児を母親だけではなく、父親も担うべきであるという認識を父親自身がもつことにより、父親の育児参加が促進するであろうと考える。

そのためには、父親が積極的に子育てに取り組

1）名古屋医健スポーツ専門学校
元子育て支援センター職員

める場への推進が必要である。本研究では、父親が来所する一つの事例として、地域子育て支援センターを選定した。育児の関わりは父親自身が育った家庭環境により、父親になった現在において、多少なりとも育児参加や育児観に影響を受けているのか。現在の子育ての現状と併せて検討する。その上で、父親たちが来所している地域子育て支援センター参加の意義を通して、父親の地域子育て支援センター来所促進のために何が必要であるのかを考察する。

Ⅱ. 調査

1．調査方法

愛知県N市とT市の地域子育て支援センター（以下、「センター」という）にて、センターを利用した父親を対象に質問紙を配布し、その場で記入を依頼した。配布数、回収数、回収率は表1のとおりである。

2．調査期間

N市2014年1月～2月　T市2015年8月

3．調査対象

本研究を調査する愛知県のN市は、人口87,360人、世帯数34,518世帯、面積は34.91㎢である（2015年8月現在）。国勢調査によると、人口増加率が全国において、上位であり、2015年8月現在においても人口、世帯数は増加している。特に、若い世代の転居者が多く、センター近くにはマンション群が立ち並び、多くの若年夫婦が居住している。支援拠点であるN市のセンターでは近年、父親の来所もみられる。

愛知県T市は、人口422,750人、世帯数172,192世帯、面積は918.32㎢である（2015年8月現在）。中核市である。支援拠点であるT市のセンターでは父親の来所がみられる。これらの人口等が異なる都市を比較することで、総合的に考察する。

4．調査内容

紙面による質問項目の内容は、対象者の①基本的属性、②育児観について、③幼少時の家庭環境について、④子育ての関わりについて、⑤センター利用について尋ねた。

回収率は表1に示すとおりである。また、本研究の対象者の基本的属性は表2に示すとおり、N市は30歳代が8割、T市は7割と多い。核家族世帯がN市は9割、T市は8割である。祖父母同居世帯についてはN市は少ないが、T市は1割みられる。子どもの人数はN市では1人が7割強である。子どもの年齢は1，2歳が多い。T市は1，2人が各4割で0，1歳が多い。経済状況は「あまり悩んでいない」「全く悩んでいない」がN市、T市共に7割であり、専業主婦家庭はN市、T市共に6割である。

表1　調査用紙の配布及び回収状況

対象者	配布数	回収数	回収率（%）
N市の父親	90	90	100
T市の父親	95	95	100

Ⅲ. 調査の結果

1．父親の育児観

図1に示すとおり、男女役割分業意識等の5つの質問をした。「出産後母親は仕事をやめるべき」は「どちらかといえば反対」「反対」の回答がN市、T市共に多いが、「3歳児神話」は「賛成」と「どちらかといえば賛成」がN市、T市共に多いという結果がある。夫は妻に仕事を退職する必要性は感じていないが、子どもの幼少時には育児に専念してほしいという思いがあるのではないか。「育児子育ては母親」に関しては「どちらともいえない」の回答が各市5割であるが、T市は賛成の割合がN市よりやや高い傾向にある。「男女役割分業意識」についてはN市は「どちらかといえば反対」「反対」の回答が、T市は「どちらともいえない」の回答が多く、反対の割合がN市より少ない。これらの結果をみると、N市は父親も家

表２　対象者の基本的属性

N市の父親（N＝90）	
・年齢	20歳代前半（1.1%），20歳代後半（5.6%），30歳代前半（47.8%），30歳代後半（36.7%），40歳代（7.7%），50歳以上（1.1%）
・家族構成	核家族世帯（93.3%），祖父母同居世帯（5.6%），その他（1.1%）
・子どもの人数	１人（77.8%），２人（20.0%），３人（2.2%）
・子どもの年齢	０歳（12.3%），１歳（43.3%），２歳（16.0%），３歳（14.2%），４歳（4.7%），５歳（5.7%），６歳（3.8%）
・父親の職種	会社員（97.8%），派遣（0%），自営業（2.2%）
・経済状況	深刻に悩んでいる（0%），少し悩んでいる（25.6%），あまり悩んでいない（52.2%），全く悩んでいない（22.2%）
・家庭状況（妻の就労）	専業主婦家庭（64.4%），共働き家庭（35.6%）
T市の父親（N＝90）	
・年齢	20歳代前半（0%），20歳代後半（9.5%），30歳代前半（38.9%），30歳代後半（33.7%），40歳代（17.9%），50歳以上（0%）
・家族構成	核家族世帯（80.0%），祖父母同居世帯（16.8%），その他（3.2%）
・子どもの人数	１人（44.2%），２人（49.5%），３人（6.3%）
・子どもの年齢	０歳（20.3%），１歳（28.5%），２歳（11.4%），３歳（18.7%），４歳（8.1%），５歳（8.1%），６歳（4.9%）
・父親の職種	会社員（98.9%），派遣（1.1%），自営業（0%）
・経済状況	深刻に悩んでいる（1.0%），少し悩んでいる（25.3%），あまり悩んでいない（51.6%），全く悩んでいない（22.1%）
・家庭状況（妻の就労）	専業主婦家庭（63.2%），共働き家庭（36.8%）

事・育児を担うべきとの思いがみられ、T市は母親が育児・家事を担うべきという傾向がN市よりやや高くみられるが、「父親も育児休暇を積極的にとるべき」の回答では、「賛成」と「どちらかといえば賛成」がN市と同様にT市も多い結果となっている。

２．父親の育った環境

表３の「父親が育った家庭環境」については、N市は専業主婦家庭が５割、T市は共働き家庭が５割と多い。またN市、T市共に年上のきょうだいが多く、６割を占め、N市は姉妹より兄弟の方が多く、T市は姉妹が多い。「あなたは自分の子

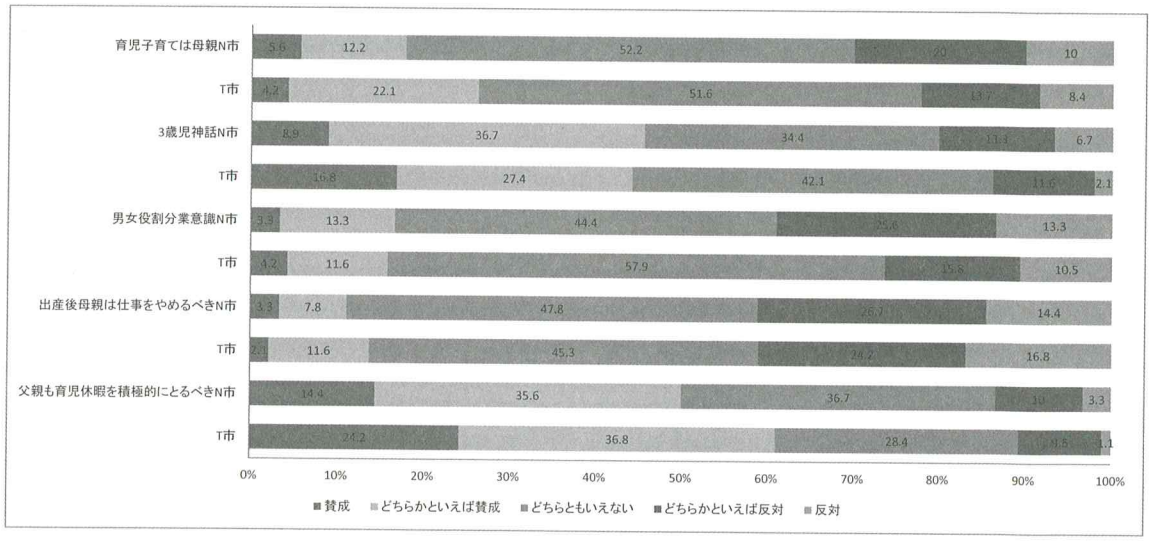

図１　父親の育児観と育児休暇について

表３　父親が育った家庭環境

①あなたが幼少、小学生の時、あなたの育った家庭は	N市　共働き家庭（38.9%）， 専業主婦家庭（57.8%），回答なし（3.3%）
	T市　共働き家庭（58.5%）， 専業主婦家庭（41.5%），回答なし（0%）
②回答者のきょうだいはいずれに該当しますか。	N市　兄（33.0%），姉（27.2%），弟（20.4%），妹（19.4%）
	T市　兄（29.4%），姉（31.1%），弟（19.3%），妹（20.2%）
③あなたは自分の子どもができるまで他の子どもの面倒をみたことはあるか。	N市　ある（35.6%），ない（64.4%）
	T市　ある（35.8%），ない（64.2%）

どもができるまで他の子どもの面倒をみたことはあるか」では、N市、T市共に「ない」人が６割である。

図２は、回答者のきょうだいと「もっと育児をしたいか」「もっと家事をしたいか」についてである。育児に関しては、きょうだいの性別（男性・女性）、または年齢の上下（兄姉・弟妹）に関わらず、「もっと育児をしたい」（とてもそう思う、そう思う）と考えている人が多い。特に、各市共、兄弟より姉妹の方が多い。家事に関しては男性、特に弟をもつ回答者は家事をしたいと思わない（あまりそう思わない、全くそう思わない）傾向にある。また姉妹をもつ回答者は家事をしたいという傾向が高くみられた。

図３，４では、回答者の育児・家事への関わりの希望と回答者の幼少時において、自分の父親が家事・育児を手伝っていたかについて尋ねた。

幼少時に自分の父親が育児を手伝っていた家庭では自分も「もっと育児をしたい」という希望が高い。また、幼少時に自分の父親が家事を手伝っていた人は「もっと家事をしたい」という希望が高く、「全く手伝っていなかった」人は家事への希望は少ないという結果であった。

育児については現在、子どもを育てている父親は、幼少時に自分の父親が育児に関わっていたか否かに関わらず、育児にもっと関わりたいと思っ

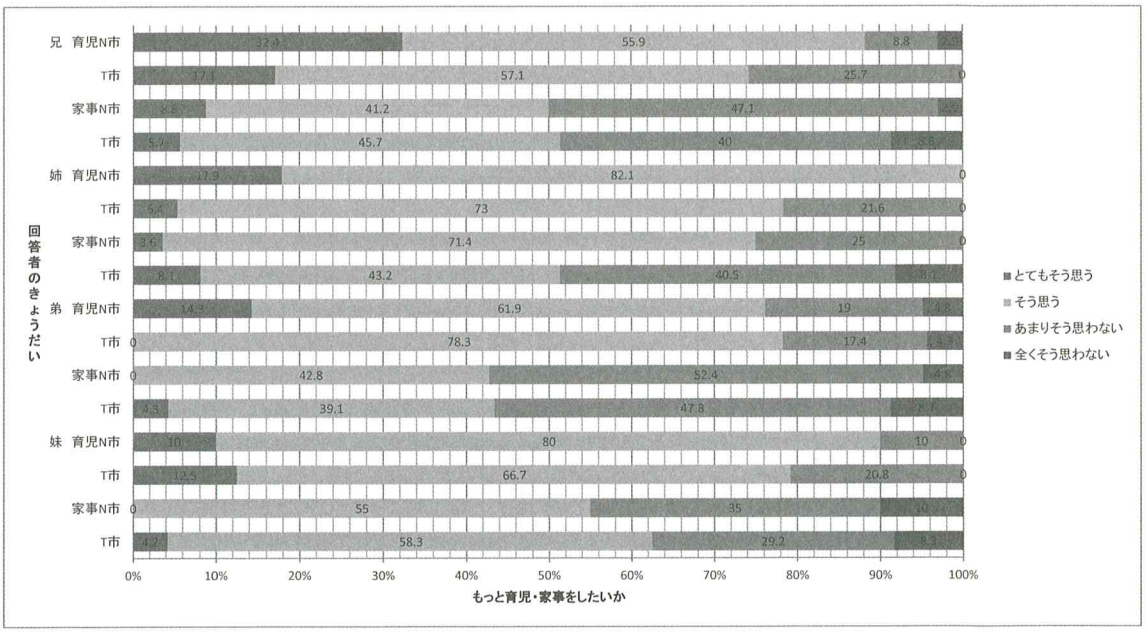

図２　「もっと育児をしたいか」「もっと家事をしたいか」と「回答者のきょうだい」のクロス集計結果

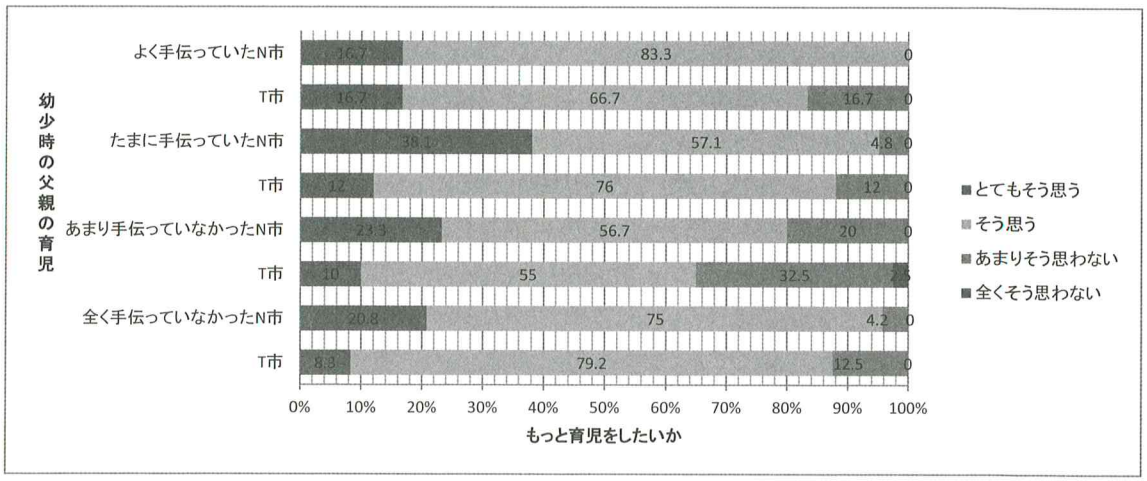

図３　「もっと育児をしたいか」と「あなたの父親はあなたの幼少時に育児を手伝っていたか」のクロス集計結果

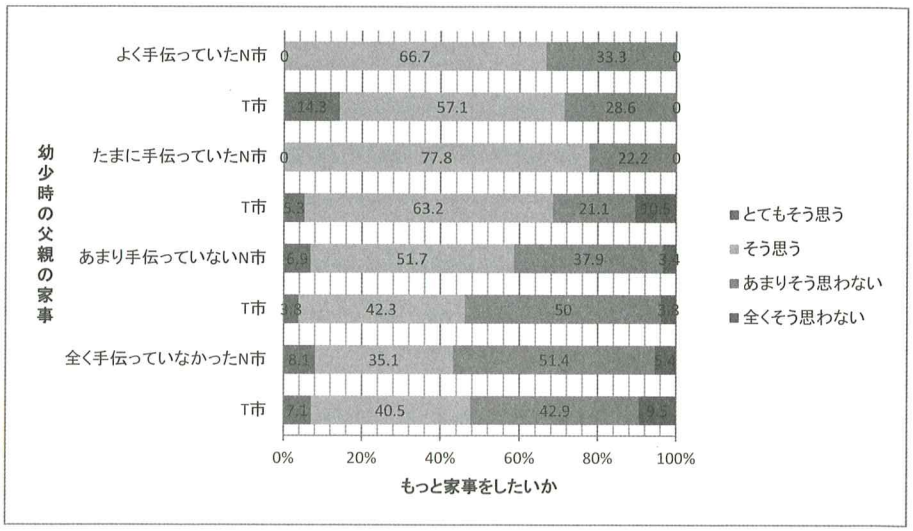

図４　「もっと家事をしたいか」と「あなたの父親はあなたの幼少時に家事を手伝っていたか」のクロス集計結果

ている人が多い。

３．父親の育児の実態

表４によると「主にどのように育児を手伝っているか」では「子どもと遊ぶ」「お風呂に入れる」がそれぞれ３割であった。「子どもの面倒をみることは０歳児の時より、現在の方がよくみているか」では、「はい」と回答した人が半数以上である。０歳児の時より、少し成長してから子どもの面倒をよくみている人が多い結果であった。

育児への関心については、「インターネットの活用」と「育児の本と雑誌の活用」でみた。この２つには各市において有意な差がみられた<（N市 $\chi^2=35.976$, $p<.001$）（T市 $\chi^2=37.838$, $p<.001$）>。育児の本や雑誌を「全く読まない」「あまり読まない」人はインターネットを「全く活用しない」「あまり活用しない」人が多い。育児の本や雑誌を「よく読む」「たまに読む」人は

インターネットの活用も多い。育児について知識を得ようと考える人の差がみられる（図５参照）。

図６については、「休日の１日の家事時間」と「子どもの数」をみた。N市とT市共に子ども１人と２人を比較すれば、１人より２人の子どもをもつ父親の休日の家事時間が長いことがわかった。

表４　父親の育児の実態

①主にどのように育児を手伝っているか。	N市　子どもと遊ぶ（34.2%），お風呂に入れる（34.2%），着替えをさせる（24.2%），幼稚園や保育園の送迎（3.7%），その他（3.7%）
	T市　子どもと遊ぶ（32.2%），お風呂に入れる（31.4%），着替えをさせる（25.5%），幼稚園や保育園の送迎（7.1%），その他（3.8%）
②子どもの面倒をみることは０歳児の時より、現在の方がよくみているか。	N市　はい（68.4%），いいえ（19.3%），０歳児（12.3%）
	T市　はい（52.1%），いいえ（36.2%），０歳児（11.7%）

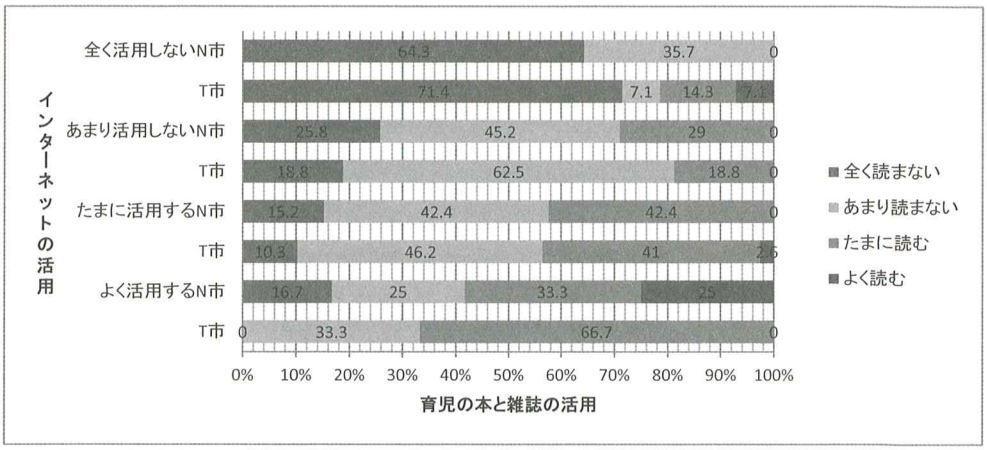

図５　「インターネットの活用」と「育児の本と雑誌の活用」のクロス集計結果

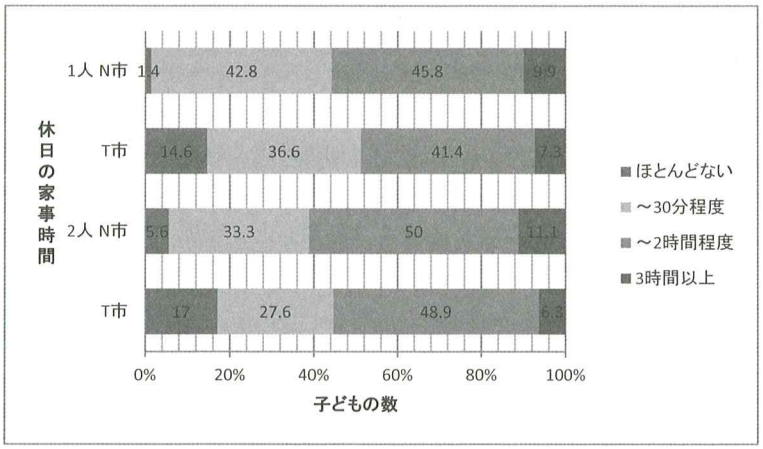

図６　「休日の１日の家事時間」と「子どもの数」のクロス集計結果

4．センターに来所する父親の考え方

「センターを利用する理由」は「子どもとのんびり過ごす」「子どもと関わる」ことを目的としている父親が多い（表５参照）。その他の意見では、「広い室内で遊べること」が述べられていた。「子育て支援に望むこと」は「地域の子育てについて情報を発信すること」や「親子遊び・講座を開く」ことが多く（表５参照）、その他の意見では、「男性の利用者増への試み（イベント等）」が述べられていた。

「センターを利用した感想」では、清潔で安全であること等の環境整備に関すること、保育士と子どもの関わりや他の来所者（親や子ども）をみるなかで様々なことを感じ、学べたこと、子ども自身が楽しく遊べたこと、子育ての情報が入手できたこと等が述べられていた（表６参照）。

図７では、「女性が多いセンターに行くことに何となく戸惑いを感じて行きにくいと思いますか」と回答者のきょうだいについてみた。きょうだいのそれぞれの群においても「あまり思わない」「全く思わない」が多く、N市は約８割、T市は７割を占めている。しかし、「とても思う」「少し思う」と感じている人も２割存在する。センターに来所する際は、回答者のきょうだいが性別（男性・女性）、年齢の上下（兄姉・弟妹）に関わらず、来所することに抵抗がない人が多い結果であった。

また、表７の「父親がもっと子育てを担うことができるようになるための取り組み」としては、自分の努力次第であるという父親自身の取り組みの必要性や勤務時間の短縮、育児休暇の取得促進等の仕事に関すること、センターが父親参加のための定期的なイベントを増やすこと等の取り組みが必要であると述べられている。

表８の「あなたにとって家事とは何ですか」の回答においては、「妻は働いていないが妻を手伝ってあげたいから」が４割と多い。「あなたにとって育児とは何ですか」では、「自分からすすんで行う」が６割と多い結果であった。

Ⅳ.考察

N市とT市は人口、世帯数等、規模が異なる。両市のアンケート調査の結果、異なる点については以下の事柄がみられた。父親が育った家庭環境はN市が専業主婦家庭、T市は共働き家庭が多い。N市は子ども１人、T市は子ども２人の家庭が多い。T市は祖父母同居が１割みられた。T市は母親が育児・家事を担うべきと考える人がN市よりやや高い傾向にあった。また類似している点では、回答者の経済状況や核家族、専業主婦家庭が多いということがあげられた。

以上のようにN市とT市は父親の育った環境や現在の家庭環境、育児観において類似している、または異なっている点があるにもかかわらず、以下のような共通した結果がみられた。

表５　センターを利用する父親の考え方

①センターを利用する理由	子どもとのんびり過ごす（N市24.2%，T市28.2%），子どもと関わる（N市19.7%，T市25.8%），他児の様子をみる（N市5.1%，T市3.2%），来所者と話をする（N市1.5%，T市0%），子どもとの接し方が学べる（N市3.0%，T市3.2%），センターから情報を入手する（N市1.0%，T市0.8%），親子遊びや育児講座に参加する（N市1.0%，T市0.8%），保育士と相談する（N市1.5%，T市0%），妻の代わりに子どもをみる（N市13.6%，T市3.2%），気分転換（N市11.1%，T市16.1%），近所にあるから（N市15.7%，T市6.5%），その他（N市2.5%，T市12.1%）
②子育て支援に望むこと	子育てについての相談にのること（N市20.4%，T市21.2%），地域の子育てについて情報を発信すること（N市31.1%，T市36.4%），親子遊び・講座を開く（N市35.9%，T市18.2%），その他（N市5.8%，T市18.2%），回答なし（N市6.8%，T市6.0%）

表6　センターを利用した感想について

<環境整備に関すること>
・清潔で安全である。
・遊び場が広く、のんびりと遊べる。
・遊具が豊富である。
・保育士がいるので安心できる。

<学んだこと>
・保育士の子どもへの関わり方をみて子どもとの接し方を学んだ。
・子どもの成長が感じられた。
・子どもが成長した様子を想像できた。
・家での遊びのヒントになった。
・子どもの個性も様々で子どもによっていろいろな動きをしていると感じた。
・子どもが何をしたいのか少しづづわかるようになった。

<子ども自身に関すること>
・子どもが楽しく遊べていた。
・子どもが人と接することができてよかった。

<その他>
・子どもの子育てに関心をもつ人が来ていると感じた。
・親子共に気分転換になった。
・子育ての情報が入手できた。
・親の友だちを作るきっかけ作りとなった。
・父親が行きにくいと思う。男性来所者が増えることで来所しやすくなると思う。
・母親の来所者は多いが、抵抗はない。
・赤ん坊の利用がしやすい。

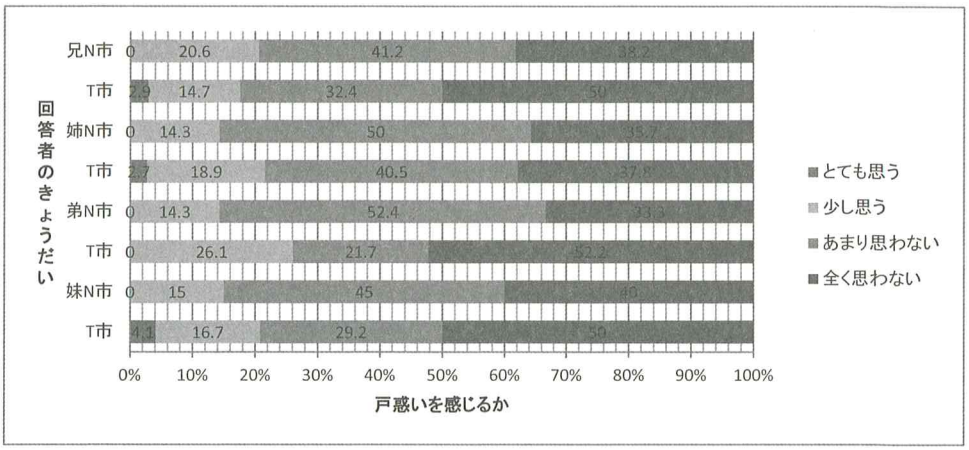

図7　「女性が多いセンターに行くことに何となく戸惑いを感じて行きにくいと思いますか」と「回答者のきょうだい」のクロス集計結果

表7　父親がもっと子育てを担うことができるようになるためにはどのような取り組みが必要か

<父親自身の取り組み>
・自分の努力・取り組み次第
・時間を作る努力をすることで子どもとの時間を増やす。
・画一的ではなく、それぞれに応じたやり方を整えることが必要である。
・一人一人が変わる必要がある。
・夫婦のコミュニケーションを多くとる。
・残業が多いため、少しでも早く帰るように心掛ける。
・自分のできることから行っていく。

<仕事に関すること>
・勤務時間の短縮
・仕事環境の理解と改善
・仕事の負担の軽減
・育児休暇の取得促進

<その他>
・男女役割分業意識をなくす取り組み
・父親の考えを変えるような啓発
・センターが父親参加のための定期的なイベントを増やす。

表8　対象者にとっての家事・育児

①あなたにとって家事とは何ですか。	共働きの為に必要（23.4%），自分からすすんで行う（25.5%），妻は働いていないが妻を手伝ってあげたいから（44.7%），その他<妻にいわれても含>（4.3%），無回答（2.1%）
②あなたにとって育児とは何ですか。	共働きの為に必要（11.6%），自分からすすんで行う（65.3%），妻は働いていないが妻を手伝ってあげたいから（16.8%），その他<妻にいわれても含>（5.3%），無回答（1.1%）

幼少時に自分の父親が育児や家事を手伝っていたかの実状は、本研究の回答者である父親たちの家事・育児への参加に多少なりとも関連していると考えられる。家事に関しては幼少時に父親が家事をしていなかった家庭では家事希望は少ない。育児に関しては、幼少時に自分の父親が育児を手伝っていなかったにもかかわらず、育児には多くかかわりたいという回答者も多数存在する。しかし、幼少時に父親が家事・育児をする場面をみておらず、さらに自分の子どもができるまで他の子どもの面倒をみたことがないという回答が多かった父親たちにとって自分の子どもの子育ては最初から学ぶべきことが多いと考えられる。

インターネットを活用する人は育児の本や雑誌も活用する人が多く、両方活用しない人との差がみられた。一概にはいえないが、育児に義務的に関わる人と育児の知識を深めようとする人の差があるとも考えられる。どちらの父親もセンターという子どもと関わる実践の場を通して、父親が成長していくことができるのではないかと考えられる。

子どもを育てている父親の現状では、0歳児の時よりも現在の方が子どもの面倒をよくみている人が多いという結果があった。多くの父親は育児に不慣れなため、0歳の子どもと接することには戸惑いを感じるのではないかと考えられる。しかしながら、現在においてはN市、T市共に専業主婦家庭、核家族が多いという特徴があり、妻が子育てをしているなかで、子どもの成長を通して父親も子育てを手伝う大切さや必要性が感じられるようになるのではないか。それは「父親も育児休暇を積極的にとるべき」の回答においても両市共に賛成が多いという結果からもわかる。

また、幼少時において自分の父親が家事を手伝っていなかった回答者は自身も手伝いの希望が低い傾向にはあるが、2人の子どもをもつ父親の家事時間が長いという結果もあった。先に述べた厚生労働省の調査[注4)]においても、夫の休日の家事・育児時間が長くなるほど第2子以降の子どもの生まれる割合が高くなる傾向があるという結果があり、父親の家事推進が望まれる。

次に回答者のきょうだいとの関連について考察する。回答者には年上（兄や姉）のきょうだいが多く、6割を占める。では、きょうだいによって、育児や家事の希望に影響があるのか。育児に関しては、きょうだいの性別（男性・女性）、または年齢の上下（兄姉、弟妹）に関わらず、「もっと育児をしたい」と考えている人は多いが、家事については男性より女性のきょうだいがいる回答者の「もっと家事をしたい」という希望が多い。これは専業主婦家庭と共働き家庭に関係なく、こうした結果がみられる。家事についてはきょうだいの性別に多少なりとも関係があるのではないかと考えられるが、これと同様に男性のセンターへの来所の有無はきょうだいの性別に関係があるのではないかと考えた。

私は女性が多く来所するセンターに男性は来所しにくいことが男性の来所の促進を妨げる1つの要因ではないかと考えていた。以前からセンターにおいて、女性の来所者から「夫が女性ばかりのセンターに行きづらいといっている」という声や男性来所者からも「行きづらいと感じる」との声を聞いたことがあるためである。

つまり、私は女性、特に姉がいる家庭で育った

回答者である父親は、女性が多く来所するセンターに抵抗なく来所ができ、兄や弟等、男性のきょうだいのなかで育った回答者は幼少時に女性との関わりが少なかったことが多少なりとも関連し、来所することに抵抗があるのではないかと考えていた。しかし、図７が示す通り、きょうだいの性別や年齢の上下を問わず、関連はないことがわかった。では、父親がセンターに来所する意義を考察する。

「センターを利用する理由」は「子どもとのんびり過ごす」「子どもと関わる」という回答が多く、「子育て支援に望むこと」では「地域の子育てについて情報を発信すること」「親子遊び・講座を開く」という回答が多く示されていた（表５参照）。現に、「主にどのように育児を手伝っているか」の質問においては「子どもと遊ぶ」が多い回答であった（表４参照）。子どもとの接し方や遊び方、講座において学ぶ場の提供が必要である。

表６のセンターを利用した感想からは清潔で安全な環境のなかで子どもと接し、育児の本やインターネットだけでなく、実際の育児を学ぶことができた様子がうかがえる。幼少時に自分の父親が育児や家事に関わる姿をみていない父親たちにとっては、子どもとの関わりや他の親子の様子をみることが実践の育児を学ぶことになると思われる。父親たちのセンターを利用した感想は肯定的な意見が多く、センター来所は意義あるものであったと考えられる。今後、父親が子どもと関わり、育児を学ぶための場への促進が必要だと思われる。

ほとんどの男性来所者は女性が多いセンターに来所しにくいと感じることはなかったが（図７参照）、来所しにくいという回答者も２割存在することも今後、考慮すべき点だと考える。これは表６で述べられているように、「男性来所者が増えることで来所しやすくなると思う」という意見が重視されるべき点になると考えられる。では、男性来所者を増やすこと、つまり、センターに来所しない父親を来所する方向へと導くためには、どのような方法を講じることが有効であろうか。来所した男性は女性が多いセンターに来所しにくいと感じる人は少なく、また「母親の来所者は多いが、抵抗はない」という記述（表６参照）もあることから、父親が初めてセンターを訪れるきっかけをセンターが提供し、来所した父親たちに上記にあげたセンター来所の意義や表６にも示されたセンターの多くの利点を広めることが、その後の来所に繋がるのではないかと考えられる。よって、父親が記述しているように、「センターが父親参加のための定期的なイベントを増やす」こと（表７参照）、「親子遊び・講座を開く」こと（表５参照）、つまり父親が来所するための環境作りが必要であり、それは父親の「自分の努力・取り組み次第」「自分のできることから行っていく」（表７参照）という考え方を支援することになると考えられる。また来所している父親たちはセンターの必要性を感じ、訪れると考えられるため、より多くの情報提供や子どもとの関わりの場を作ることが必要である。

最後に「対象者にとっての家事、育児とは何か」について尋ねた。家事においては「妻を手伝ってあげたい」という思いがあり、育児に関しては「自分からすすんで行う」という回答が多かった（表８参照）。父親にとって家事は妻への気遣いと考えられ、育児は自ら関わりたい事柄であると考えられる。

現在の父親は育児に関わりたいという人が多い。父親の気持ちを推進できる場、父親の育児経験の不足を補う場として、父親がセンターを活用できるような雰囲気作りと参加型のイベントを増やすことが必要である。

育児は家庭で行うものであるが、センターは育自の場、つまり、父親が子どもと共に成長していけるように支援をしていく役割の一助を担っていると考えられる。

注

注１）1996年には厚生省の「育児をしない男を父とは呼ばない」のスローガンに象徴されるように、男女共同参画を推進し、男性の育児参加を提唱し始めた。

注２）平成27年版「少子化社会対策白書」内閣府（総務省統計局「労働力調査」から）子育て期にある30代男性については17.0%が週60時間以上の就業となっており、他の年代に比べて最も高い水準となっている。また男性が子育てや家事に費やす時間をみると、６歳未満の子どもをもつ夫の家事関連時間（育児時間を含む）は先進国中、最低の水準となっている。

注３）内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」1979年当時の意識調査をみると、「夫は仕事、女は家事・育児」という考え方について「賛成」、「どちらかといえば賛成」を合わせると、その割合は７割を超えていた。反対は２割に留まっていた。2010年の調査では、「賛成」と「どちらかといえば賛成」が５割、また「反対」、「どちらかといえば反対」が４割と賛成がやや多い結果である。1979年に比べれば、賛成は少なくなっているが、いまだ賛成が多い現状がある。

注４）厚生労働省大臣官房統計情報部「第11回21世紀成年者縦断調査」（2014）の結果である。第11回の調査対象は平成14年10月末時点で20～34歳であった全国の男女14,671人であり、調査時期は平成24年11月である。「夫の休日の家事・育児時間別，第２子以降の出生状況」の「家事・育児時間なし」の「出生あり」は14.0%、「出生なし」は86.0%,「６時間以上」の「出生あり」は76.5%、「出生なし」は23.5%であった。

引用・参考文献

１）厚生労働省「平成26年度雇用均等基本調査」2015

２）内閣府「男女共同参画白書『父親の子育ての優先度－第１部男女共同参画社会の形成の状況，序説 第３章仕事と子育ての両立』」2005

３）柏木恵子・若松素子「『親になる』ことによる人格発達: 生涯発達的視点から親を研究する試み」『発達心理学研究』５，１，1994，pp.72-83.

４）牧野カツコ「育児不安の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』10，1988，pp.23-31.

５）加藤邦子・石井クンツ昌子他「父親の育児かかわり及び母親の育児不安が３歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる２つのコホート比較から」『発達心理学研究』13，１，2002，pp.30-41.